

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00445

研究課題名(和文)オブジェクティヴィズムの機能：アメリカ詩人パーマーの作品における「対話」の分析

研究課題名(英文)The Function of Objectivism: "Conversations" in the Works of Michael Palmer

研究代表者

山内 功一郎 (Yamauchi, Koichiro)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：20313918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：現在アメリカを代表する詩人の一人と目されているマイケル・パーマーの作品を分析することによって、アメリカ詩における「オブジェクティヴィズム」(直訳すれば「客観主義」だが、本質的にはこれは「事物主義」を指す概念である)の実践とその意義を研究した。具体的な作品分析を通してオブジェクティヴィズムの実態に迫った点において、本研究は先駆的な試みとなった。

研究の結果、たとえば特に思弁的實在論における事物が歴史や文化の相関性を拭い去った「非人間主義的な事物」であるのに対して、パーマー作品のオブジェクティヴィズムにおける事物はむしろ異文化や異言語の環境下で「対話」を促す事物であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は、パーマー作品の分析を通して文学の領域と哲学・思想の領域を統合した点にある。その結果、特にパーマー作品における事物は、人間の意識との間で相互的な影響を与え合うので、本質的に双方向的な対話の関係性を生み出すことが明らかになった。この視点は、今後のアメリカ詩研究において一つの指標を示したと考えられる。

また本研究課題の社会的意義は、上述のような「対話」の在り方を突き止めた点において認められる。この視点は、ともすれば異文化や異民族を不気味な存在として排斥しがちな現代社会のコミュニケーション不全を解消し、対等かつ健全な交渉の場を実現するうえで有効な手段を示したと言える。

研究成果の概要(英文)：By analyzing the works of Michael Palmer, one of the leading poets in the States, this research investigated the function of "Objectivism" in American poetry. The project was a pioneering attempt in that it approached the actual state of Objectivism through the close readings of Palmer's poems.

The above research proved the following point. Unlike Speculative Realism (a recent philosophical movement underscoring the "inhumanistic" aspects of objects), Palmer's works show us an open field of reverberating objects promoting the "conversations" among various spheres of cultures and histories. This fact reveals that the Objectivism of poetry has a function to encourage us to take part in the multiple conversations, which establish a forum for equal and sound negotiations in our time.

研究分野：アメリカ詩

キーワード：現代詩 アメリカ詩 アメリカ現代詩 アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

「オブジェクティヴィズム」(Objectivism)は、近年も注目を集めているアメリカ詩研究のテーマの一つである。直訳すればこれは「客観主義」だが、本質的には「事物主義」と述べなおすことができる。この分野の研究を精力的に推進してきたピーター・クウォーターメインが指摘しているように、基本的に「オブジェクティヴィズム」は、モダニズムの巨匠エズラ・パウンドが主観的な抽象論を退けて、「事物の直接的提示」を詩作の奥義としたことに端を発している。このように、空論より事物を重視することを旨とする「オブジェクティヴィズム」は、現代詩の最前線においても重要な潮流を形成してきた。そしてこういった潮流は、近年では思弁的实在論を始めとする現代哲学・思想との対比において論じられることも多くなってきている。

しかしその反面、パーマー作品におけるオブジェクティヴィズムの具体的な展開については、まだアメリカ本国でもほとんど研究が進展していなかった。これは、オブジェクティヴィズムをめぐる文学研究と哲学・思想研究のそれぞれが着実に層の厚みを増しているにもかかわらず、これら両要素を統合する研究がまだ行われていなかったことを意味している。このような欠損に起因する弊害をわずかなりとも是正するために、研究代表者は本研究課題を開始することになった。

2. 研究の目的

本研究の最終的な目標は、以下の二点を明らかにすることに絞られた：

- (1) オブジェクティヴィズムは、思弁的实在論等の現代哲学・思想とどのような点において異なっているか。
- (2) オブジェクティヴィズムは、どのような「対話」の有効性を示しているか。

上記(1)の目標についてできるだけ簡潔に補足すると、次の通りになる。たとえば特に思弁的实在論における事物が歴史や文化の相関性を拭い去った「非人間主義的な事物」であるのに対して、パーマー作品のオブジェクティヴィズムにおける事物はむしろ文化や言語的要素との「相互的な干渉を促す事物」である。この点をパーマー作品の分析によって明らかにすることが念頭にあった。

さらに上記(2)の目標についても付言すると、次の通りになる。思弁的实在論における事物はあくまでも人間の意識のフレームから逸脱した異質で「不気味な事物」だが、パーマー作品におけるオブジェクティヴィズムが示す事物は、人間の意識との間で相互的な影響を与え合うので、本質的に双方向的な対話の関係性を生み出す。このような意味における「対話」は、ともすれば異文化や異民族を不気味な存在として排斥しがちな現代社会のコミュニケーション不全を解消し、対等かつ健全な交渉の場を実現するうえで有効な作用を示すはずである。

こういった目論見のもと、上記(1)および(2)の目標が設定された。

3. 研究の方法

上記の研究目標を達成するために、研究代表者はマイケル・パーマー(元全米詩人協会理事)の惜しめない協力を得つつ研究を進めるための信頼関係を確立した。パーマーは研究分担者としてではなく、研究対象となる作品に関する情報を提供する研究協力者として、無償の協力を惜しまないことを確約した。したがって、本研究は研究代表者の計画と責任において進められた。

また研究代表者は単独で調査、論文作成、研究発表を行うほか、国内外のアメリカ文学者との交流を図りつつ研究を遂行する計画を立てた。コロナ禍を始めとする諸事情のため当初の計画を修正する必要も生じたが、2019年度から21年度の三年間にわたる研究活動は、基本的に以下のような方法によって支障なく進められた。以下、各年度に遂行した研究の方法を記していく。

(1) 2019年度

研究計画の初年度にあたる2019年度には、詩誌『現代詩手帖』に「五つの展望台」を発表した。これは2019年に日本で発表された海外詩の翻訳をめぐり分析で構成された論考である。その他に、詩誌『みらいらん』に発表した田村隆一論や、『週刊読書人』に発表した野村喜和夫論も挙げることができる。これらの場において展開した考察の成果は、アメリカ詩をめぐる本研究課題に取り組む上で、直接・間接を問わず効果的に活用できた。

研究発表としては、7月に静岡大学浜松キャンパスで文理の枠組みを超えて開催された「第13回超領域研究会」で講演を行ったことを挙げることができる。これは2019年度に第4期静岡大学研究フェローに選出されたことを機に行った講演である。講演者として現在においてアメリカ詩を読む意味について考察したことは、本研究課題の本来的な目的を確認する上でも、極めて有意義だった。

またこの年の6月には、ソルボンヌ大学で3日間に渡って催されたダンカンをめぐるシンポジウムを聴講することができた。同シンポジウムでは、基調講演を務めたマイケル・パーマーを始めとする第一線の詩人・研究者の知遇を得て、研究上の相互協力を結べる体制を整えることができた。また2020年2月に詩人の吉増剛造氏を静岡大学に招聘し、講演を行っていただくことができた。同講演ではアメリカの詩人による実践を吉増氏がどう吸収し解釈したかを確認することができた。

なお2019年度には、オブジェクティヴィズムをめぐる資料の収集・整理を行った。資料は文献を中心とするが、パーマーを始めとする詩人の作品も整理した。特にパーマーに大きな影響を与えたモダニズム詩の巨匠エズラ・パウンド、後続世代のロバート・ダンカン、そしてパーマーの作品を精読し、テーマごとに作品の分類を行って、論文および研究発表の準備を行った。

総じて2019年度には、研究課題を遂行するための土台作りを行った。

(1) 2020年度

研究計画期間の2年目にあたる2020年度には、詩誌『現代詩手帖』に「時の反響室」を発表した。これは2020年2月に静岡大学で行われた吉増剛造の朗読会の様子について詳述しつつ、この詩人の創作において生成する多声的な空間について分析した論文である。吉増氏の詩作は本研究課題の対象となる詩人、マイケル・パーマーの詩作と交錯し共鳴しあう要素に富んでいる。とりわけ詩作品を詩人個人の単なる感情表白やメッセージへと収束させずに対話空間へと開いていく吉増氏の実践を分析することは、本研究課題を進めるうえで非常に有益な実績となった。またこの分析を通して、公共空間で自由にやり取りを行うことが困難な現在においてこそ詩が果たしうる機能を検証することにもなった。この検証は、詩を一部の専門家のみの閉域から解放する試みにも繋がった。

その他の実績としては、学会誌『英文学研究』に発表した飯野友幸著『フランク・オハラ 冷戦初期の詩人の芸術』の書評も挙げるができる。あくまでも書評ではあるが、その執筆を通して自らアメリカ詩における創作プロセスの特徴について検証することができたので、この成果も本研究課題に取り組む上で直接・間接を問わず効果的に活用できた。

また2020年度はコロナ禍及び社会情勢的な条件を鑑みて海外におけるリサーチ等はやむを得ず見送ったが、マイケル・パーマー氏とは有意義なやりとりを行うことができた。その過程で得られた情報も大いに役立てつつ、研究成果のとりまとめに着手した。2019年度に引き続き、2020年度もさらにパウンド、ダンカン、そしてパーマーの作品を精読し、テーマごとに作品の分類を行って、論文および研究発表の準備を進めた。

総じて2020年度には、次年度に論文を発表するための構想を設定し、草稿の執筆を開始した。

(2) 2021年度

研究計画期間の最終年度にあたる2021年度には、学会誌『シルフェ』に査読付きの論文「「押韻のフィールド」へ向かって パウンドからダンカンを経てパーマーへ」を発表した。副題に示している通り、これはアメリカン・モダニズムを代表する詩人エズラ・パウンド、その次世代の詩人ロバート・ダンカン、さらに本研究課題の対象となっているマイケル・パーマーの三詩人を取り上げ、いわゆるパウンド・トラディションにおいてパウンドの詩作法がどのように更新され、「オブジェクティヴィズム的な詩作」が展開されることになったかを明らかにした論文である。この研究成果によって、特に後続世代の詩人としてパーマーが、パウンドの教え「母音の音調の導き」に潜む可能性を拡大し、古今東西の様々な詩人たちの声が反響する対話空間を見出したことが解明された。この点において、この論文は本研究課題の成果を具体化し総括したと言える。

また今年度の主要な成果としては、さらに2022年1月に日本アメリカ文学会東京支部例会の全体会で行った研究発表「エズヴァーシティの内から／外から パウンド、ダンカン、ヘジニアン、パーマーを読む」も挙げるができる。この講演では詩作法を伝授する教育者としてのパウンドが、後続世代の詩人たちに与えた影響について発表を行った。特に詩作法を示す一種の装置としてパウンドの長編詩『詩篇』を捉え、その具体的な特徴を「詩篇1」の分析を通して示した成果は、後続世代の詩人パーマーの作品を解釈するうえでも有益な視点を確立することになった。この研究発表は全体会でできたので、様々な研究領域の専門家たちと貴重なやり取りを行った。

なおこの年度には、パーマーの最新詩集『シスター・サタンに捧げるささやかなエレジー』(2021)所収の連作「ミッドナイト」を訳編し、詳細な解説と共に『現代詩手帖』に発表した。

総じて2021年度には、学術論文と研究発表によって、当初の予定通り本研究課題の成果を公にすることができた。

4. 研究成果

(1) もっとも包括的な研究成果は、2021 年度に学会誌『シルフェ』に発表された査読付きの論文「押韻のフィールド」へ向かって「パウンドからダンカンを経てパーマーへ」である。既述のように、この論文はパウンド、ダンカン、そしてパーマーのアメリカの三詩人の作品を取り上げた論文なので、本研究の成果を 20 世紀モダニズム以降現在にまで至る射程の中でまとめることになった。概略は以下のとおりである。まず第一部「パウンドとダンカン」において、パウンドが提唱した詩作法の概念「母音の音調の導き」の特徴を整理したうえで、この教えをダンカンが取り入れつつも独自の形で更新し、自らのロマン主義的な資質と競合させて創作を展開したことを確認した。

続く第二部「パウンドとパーマー」では、パーマーもパウンドの「母音の音調の導き」想起する一方で、音のみでなく意味やイメージの反響も生じさせるために「さまざまな事物に韻を踏ませ、押韻のフィールドを造り出すこと」を重要視していることを解明した。具体的には、この論述は 1990 年代に発表されたパーマーの代表作に数えられる連作「ザンゾットへの手紙」を分析しながら行った。

そして第三部では総括を行った。そのために、まず上述の三詩人がそれぞれ「母音の音調の導き」を活用しているにもかかわらず、具体的な詩作の実践のありかたは三者三様であることを確認した。そのうえでパーマーが提唱した「押韻のフィールド」という概念に改めて注目しながら、2016 年に出版されたこの詩人による詩篇「意味の欠けた詩」を分析した。その結果、「押韻のフィールド」が古今東西の詩人たちが時を超えて声を交わし合う「対話空間」であることが明らかになった。具体的には、パーマーの作品中に現れる事物のイメージが、アルチュール・ランボーの詩篇「道化の心臓」における事物のイメージと共鳴していることをつきとめることによって、上述の見解は裏付けられた。こうしてパーマーが即物的に「さまざまな事物に韻を踏ませ」ることによって「オブジェクティヴィズム的な詩作」を展開していることが証明された。

論文の概要は以上である。補足するまでもないが、このようなパーマー作品におけるオブジェクティヴィズムの実践は極めて対話的であり、時代や文化圏を超えた出会いの可能性に満ちている。この点において、本研究課題の成果は、思弁的实在論等の現代哲学・思想の視点とは一線を画する創造的な展望を示したと言える。

(2) 既に触れた通り、2022 年 1 月に日本アメリカ文学会東京支部例会の全体会で行った研究発表「エズヴァーシティの内から / 外から パウンド、ダンカン、ヘジニアン、パーマーを読む」も本研究課題の主要な成果として挙げるができる。学会のホームページ上で公開した発表要旨中でも記したように、この研究発表では次の点を論証した。「パウンドの教育理念が直接及ぶ圏域を「エズヴァーシティ」と呼ぶとすれば、その内側から自己増殖しつつはみ出していったのがダンカンであり、外側から接続と切断を繰り返しながら渡り合っているのがヘジニアンやパーマーである」。このような視点からパウンドからパーマーに至る詩人たちの「対話」的实践の成果を学会の公的空間で明らかにできたことは、本研究課題の趣旨から鑑みても大変有益だった。

以上。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 60
2. 論文標題 「押韻のフィールド」へ向かって パウンドからダンカンを経てパーマーへ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シルフェ	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 マイケル・パーマー著・山内功一郎訳編	4. 巻 65/2
2. 論文標題 （翻訳）「ミッドナイト」より	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 98-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 3429
2. 論文標題 （書評）言葉でできたインスタレーションーージョン・アシュベリー著、飯野友幸訳『凸面鏡の自画像』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 65/3
2. 論文標題 （紹介記事）日本刀とナイフー城戸朱理の詩とその英訳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 160-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 63.7
2. 論文標題 時の反響室	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 70-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 97
2. 論文標題 (書評) 飯野友幸著『フランク・オハラ 冷戦初期の詩人の芸術』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 114-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 3337
2. 論文標題 (書評) ダンスする詩と歌のパートナーシップ—原成吉著『アメリカ現代詩入門』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 4
2. 論文標題 言語と邂逅するチャンス 田村隆一とジョルジョ・アガンベンにおける「落下」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 みらいらん	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 3303
2. 論文標題 「犬と狼のあいだ」を探る 繰り広げられる韻文と散文の駆け引き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内功一郎	4. 巻 62.12
2. 論文標題 五つの展望台 海外詩展望	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 75-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山内功一郎
2. 発表標題 エズヴァーシティの内から / 外から パウンド、ダンカン、ヘジニアン、パーマーを読む
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山内功一郎
2. 発表標題 詩を読む意味とは何か 三人のアメリカ詩人による作品について
3. 学会等名 静岡大学超領域研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------